

# 学び直し講座実施モデル 資料等整理

## 整理 1 : 学び直し講座の基本方針

(概要)

- 本学び直し講座は、ITシステムの開発等に従事する現役のITエンジニアを対象とし、最新テクノロジーを活用したIT戦略の策定・展開等に係る専門知識・スキルの習得を目的とすることから、実施モデルの具体化にあたっては、以下を基本方針として検討を進めることとした。
- 基本方針をまず明記した理由は、実施モデルの土台となる考えを示しておくことが、他校がこの実施モデルの理解の促進のみならず、その改編やカスタマイズを行う際に必要不可欠な情報であると判断されたためである。

(基本方針)

### ●専門知識の習得はeラーニングを基本とする

- 本学び直し講座の対象者の想定は、IT実務経験5年程度(20代半ばから後半の年齢)のエンジニアである。
- 対象者はITの専門職としてITに関する一通りの専門知識を有し、開発・運用等の実務経験もある。それらをベースとすることで、最新テクノロジーに関する新しい専門知識の学習は、一定程度、自己学習で賄うことができるものと想定できることから、専門知識の学習についてはeラーニングを活用していく。
- 専門知識の学習にeラーニングを採用するもうひとつの理由は、多忙さへの配慮である。IT業界は慢性的な人材不足という現状もあり、ITエンジニアの多くは毎日を業務で謀殺されているケースも少なくない。そのような日常の中で、最新テクノロジーへのキャッチアップやスキルアップを余儀なくされているが、eラーニングはその利便性の高さからIT業界でも活発に利用されている。また、業務として日ごろテクノロジーに向き合っているITエンジニアにとって、デジタル化された教材は寧ろ取り組みやすいという面もある。
- 以上の理由から、専門知識の習得はeラーニングを活用した自己学習とすることを基本方針のひとつとした。

### ●集合研修でスキル習得を図る

- 本学び直し講座では、最新テクノロジーを活用した I T 戦略の策定・展開等に加えて、それを実際の課題に適用できる実践スキルの習得を目的としている。
- このようなスキルの習得は、eラーニングなどによる知識学習だけではカバーできない。本事業の実証講座で実施したような実務的な課題に対して I T 戦略やシステム化企画を立案したり、展開方策の具体化を図ったりする演習が不可避となる。
- もちろん、このような学習についても eラーニングである程度実現可能ではある。例えば、テレビ会議システムを利用すれば、受講者が同じ部屋に集まることなく、グループでの調べ学習や議論を行うこともできる。これはすでに多くの企業において利用されているテレワークのスタイルで集合研修を代替しようとするやり方である。
- しかし、本学び直し講座の集合研修では、所属や経験、年齢などが異なる、互いに面識のないエンジニアがグループとして学習活動を進めていくのが基本となるため、ネットを介したグループワークの活性化は容易ではない。互いに対面し、ダイレクトに意見を交わしたり情報を共有したりする学習プロセスを経ることで、I T 戦略策定等をめぐるディスカッションやプレゼンテーションなどのグループワークが、より実務的なものへと展開していくもの期待される。
- 実際のところ、今年度事業において昨年度策定したカリキュラム 2018 の見直しを行った結果、I T 戦略策定等に係る実践スキルの向上を図る狙いから、改訂版となるカリキュラム 2019 では集合研修の時間数を増やしている。
- eラーニングで十分に学習可能な専門知識は自己学習とし、そこで学んだ知識を実務的な課題に適用する学習については集合研修とする構成が、本学び直し講座の基本となるスキームである。

#### ● eラーニングによる継続的な学びの支援策を具体化する

- eラーニングは I T エンジニアに限らず、社会人全般にとって格好の学習ツールであり、現在では広範な学習分野で利用・活用が進んでいる。
- その一方で、自己学習が基本となるため「継続が難しい」という課題への対処が常に求められている。
- 本学び直し講座の実施においても、eラーニングによる自己学習の継続を支援するための具体策を実装し、運用していく必要がある。
- 本学び直し講座の実施モデルにおいては、具体策実現のアプローチを大きく 3 点に区分する。

##### (1) eラーニングコンテンツの工夫

学びやすい eラーニングコンテンツ、学び続けやすい eラーニングコンテンツのための工夫は必須である。基本方針として以下を構想するが、これらについては継続的に見

直し、より実効性の高い工夫を検討していくことが肝要である。

#### ○マイクロラーニング

短時間でひとつのテーマの学習が完結する「マイクロラーニング」の手法を取り入れるのは有効な方策である。特に知識の理解・習得の学習では、小さい単位の学習項目を繰り返すことで効果が向上するという研究報告もある。

#### ○ドリル&プラクティス

印刷教材を比べたときのeラーニングの優位性のひとつが対話性・即時フィードバックである。C B T (Computer Based Testing) は、一問一答形式のしくみだが、対話的で正誤判定や解説の提示といった即時フィードバックが可能である。

#### ○講義映像・音声解説

印刷教材では、学習者が書かれている内容を「自ら読む」というスタイルになるが、eラーニングでは、講義の映像やテキスト・図表などの音声解説を「視聴する」というリアルな授業を受けるのと近い感覚で学習を進めることもできる。「自ら読む」よりも受け身的にはなるが、無理なく学習を続ける上で、こうした学びのスタイルを組み込むことも必要である。

#### ○ゲーミフィケーション

ゲーム的な演出やしかけを取り入れることでモチベーションを喚起するゲーミフィケーションは、特に若い世代に対して有効な方策であり、近年この考え方に基づくeラーニングも登場している。

- 今年度事業で新規に開発した領域「IT戦略的活用」の学習ユニット「経営戦略とシステム戦略」のeラーニングでは、マイクロラーニングの手法を採用して設計されている。
- 各コンテンツは、ビジネスインダストリやシステム戦略などのテーマを個々に細分化し、短時間でひとつのテーマを学習できるコンパクトな構成となっている。これも学びやすさのための工夫である。
- このコンテンツでは、eラーニングで学習した専門知識の理解と定着の促進を図る狙いから、ドリル&プラクティス(CBT)タイプのeラーニングも整備している。
- 「経営戦略とシステム戦略」では音声解説の機能が付加されており、提示されるスライド資料の解説を聞きながら学習を進めていく構成となっている。
- 集合研修の教材である「ケースで学ぶ最新ITの戦略的活用」においても、事前学習教材としてeラーニングを提供しており、事前の個人ワークへの取り組み方を音声解説で確認することができる。

## (2) 学習状況のモニタリングと遠隔サポート

学習管理システム（LMS）が提供する受講者の学習履歴データの活用も重要である。

eラーニングの学習進捗やテストの成績などをモニタリングし、必要に応じてメールやコミュニティボードなどで遠隔サポートできる運用環境、組織体制も整えていく必要がある。

今年度事業では、実証講座の実施期間の制約から、この点についての対応は充分ではなかったが、実施モデルの重要なファクターであり、次年度以降の活動ではさらなる充実化を図っていく必要がある。

## (3) 集合研修とのブレンディング

集合研修とのブレンディングも重要となる。

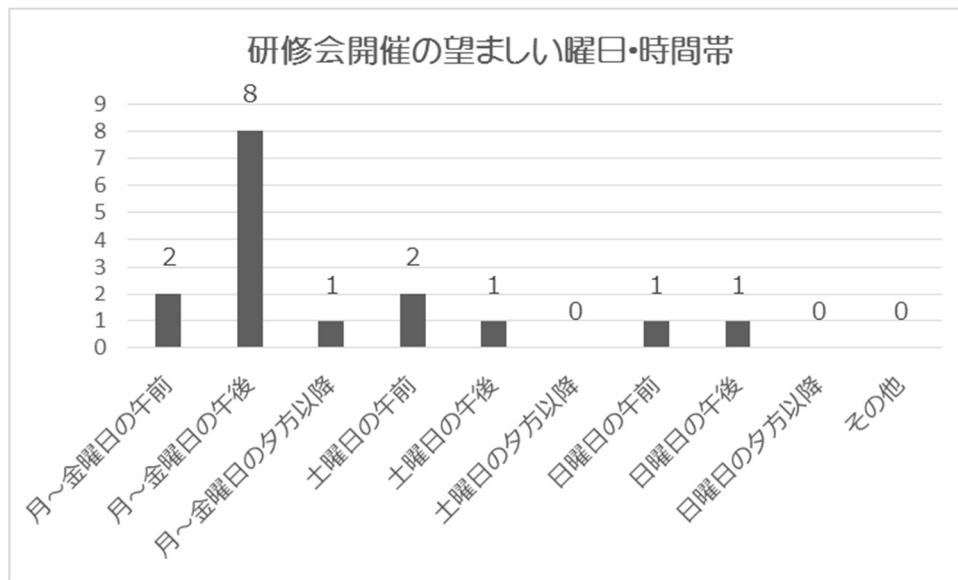
今年度の実証講座では、集合研修の事前に個人ワークという自己学習型の演習が設定されたが、集合研修と連動した自己学習は、自己学習への動機が強まるだけでなく、集合研修での学びの質を高めるという効果もある。

ブレンディングの発展形として、近年「反転授業」が注目され、またその取り組みも教育現場に広がりつつあるが、集合研修の学習密度を高め学習効果の向上を図る上で、多様なブレンディングの方法を取り入れていく。

## 整理 2 : 運営方法「開催日程」

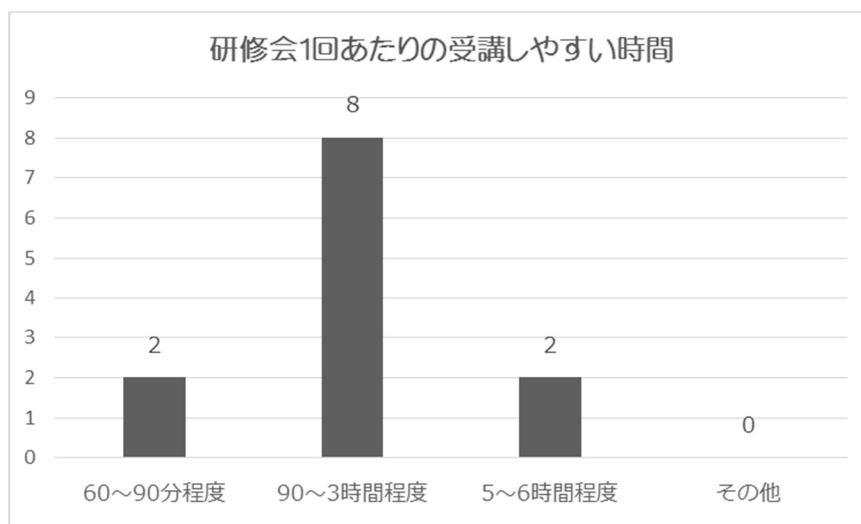
- ITエンジニアに限らず、社会人を対象とする学び直し講座の運営において、開催日程は非常に重要なポイントである。
- この点については、今年度事業の実証講座における受講者アンケートの結果が参考になる。以下にその結果を掲載する。
- 次のグラフは学び直し講座のような研修会（集合研修）の開催について、受講者からみて望ましいと思える曜日・時間帯を質した結果である。
- これによれば「月～金曜日の午後」が抜きん出て多い。
- これに対して、土曜日・日曜日の夕方以降が望ましいという回答は皆無である。
- 受講者の多くは、勤務時間帯の中での受講を望んでいることがわかる。

### 研修会開催の望ましい曜日・時間帯 (MA)

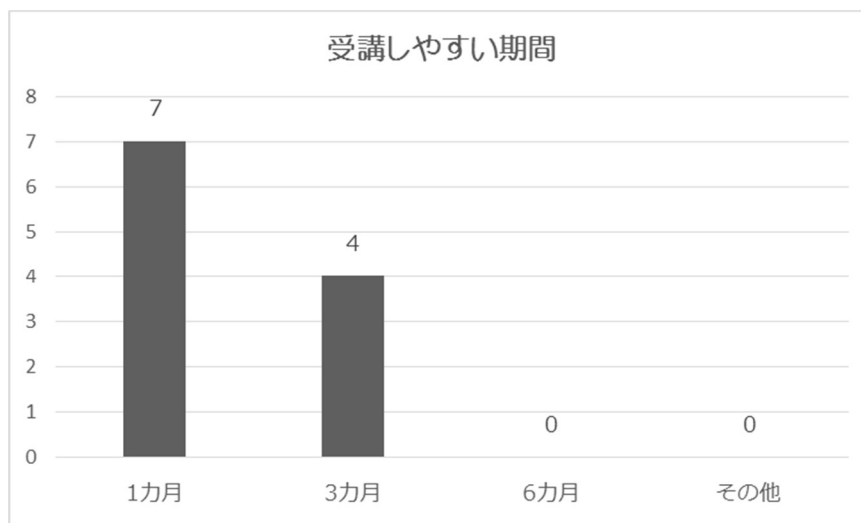


- 次のグラフは、研修会 1 回あたりの受講しやすい時間について問うた結果である。
- 最も多いのは「90 分～3 時間程度」となっている。先の「受講しやすい曜日・時間帯」では、平日の午後を望む声が多数であったが、これはその結果とも符合している。
- また、受講しやすい期間に関しては、「1 カ月」とする回答が最も多かった。

### 研修会 1 回あたりの受講しやすい時間



### 受講しやすい期間



- 以上を整理すると以下ようになる。
  - 集合研修の開催は、「平日（月～金曜日）の午後」が望ましい。
  - 集合研修の1回あたりの時間数は「90分～3時間」程度が受講しやすい。
  - 集合研修・eラーニング等を含む1講座の開催期間は、「1カ月」を望む受講者が多い（一部に「3カ月」という意見もある）。

### 整理3：運営方法「受講者募集」

- 専門学校が社会人一般を対象とする学び直し講座を実施する場合、大きな課題のひとつが受講者の募集である。
- 専門課程とは対象者の属性その他が異なるため、広報・受講者募集のやり方も、学び直し講座に応じた方法とする必要がある。

#### ●企業を対象とする募集活動「B2B」型を基本とする

- 本学び直し講座の場合、対象者が現役のITエンジニアと明確であるが、募集活動はITエンジニア個人ではなく、ITエンジニアが所属している企業を対象として展開する。
- 企業を対象とする「B2B型」の募集活動には以下のようなメリットが見込めるからである。
  - ITエンジニアは「業務」として講座を受講できる

- そのため、集合研修が平日・日中の時間帯であっても受講しやすい
  - 業務であるため、研修会に臨む姿勢や学習態度もより真剣味が増す（学習効果が期待できる）
  - 個人一般を相手に展開する募集活動に比べて低コストかつ高効率が見込める
- 「業務」としての受講は、結果として上記の受講者の要望「平日の午後、3時間程度が受講しやすい」とも合致することになる。
  - これに対して、ITエンジニア個人を対象とする「B2C」型の場合には、業務として認められない場合には「仕事を休んで受講する」、あるいは「土日などの休日に受講する」などの制約が生じることになる。これ自体が受講者にとってハードルになりかねない。
  - 専門学校の側から見ても、「B2B型」の裏返して、幅広く募集活動を行わなければならないため、宣伝広告等のコストがかかり、ヒット率も不安定などのデメリットがある。

#### ●企業との連携体制を構築する

- 上記「B2B」型で募集活動を展開し、企業に継続して受講してもらう（毎年新しいITエンジニアを送り出してもらう）ためには、学校と企業との間で連携体制を構築し維持していくことが必須である。
- そのためには、学校の教育部門と企業の開発部門や人事部門などがダイレクトに情報をやり取りし、実務現場のニーズを把握し、それを学び直し講座へと落とし込める体制を整え運用していかなければならない。

## 整理4：実施モデル

- 上記の基本方針に基づく、本学び直し講座の実施モデル2019年度版を以下に示す。
- これは、今年度事業の活動の結果により策定されたものであり、次年度以降も学び直し講座の実施・検証等の結果を踏まえて、更新を続けていく予定である。

### 実施モデル2019（概要）

対象者	<p>現役のITエンジニア</p> <p>※IT実務経験年数5年程度を想定とするカリキュラムだが、これはひとつの目安として、実際の募集ではケースバイケースでの対応も可能</p> <p>※集合研修のグループワークでは、経験年数等の異なる受講者の組み合わせによる相互作用が高い学習成果を生むこともある</p>
-----	--

募集活動	企業に対して直接、講座の開催を告知・募集する（B2B型）
開催期間	①1カ月モデル ②3カ月モデル

### 実施モデル 2019（詳細）

① 1カ月モデル		
（自己学習（eラーニング））	計 42.0 時間	標準学習時間
○「最新テクノロジー」 31.5 時間		2.0 時間／日（21 日間）
○「IT戦略的活用」 10.5 時間 （集合研修）	計 9.0 時間	0.5 日 3 日間
○「最新テクノロジー」 3.0 時間		
○「IT戦略的活用」 6.0 時間		
② 3カ月モデル		
（自己学習（eラーニング））	計 42.0 時間	標準学習時間
○「最新テクノロジー」 31.5 時間		1.0 時間／日（42 日間）
○「IT戦略的活用」 10.5 時間 （集合研修）	計 18.0 時間	1 日 3 日間 または
○「最新テクノロジー」 6.0 時間		0.5 日 6 日間など
○「IT戦略的活用」 12.0 時間		

## 1カ月モデル

- 開催期間を多くの受講者が望む「1カ月」とした実施モデルが上記①の「1カ月モデル」である。
- eラーニングによる自己学習の標準学習時間数は 42.0 時間であるため、1日平均 2 時間、計 21 日間で学習を完了する。
- 集合研修は、学び直し講座のカリキュラムでは計 18.0 時間の設定となっているが、これをフルに実施するのは難しいことから、このモデルでは「最新テクノロジー」 3.0 時間、「IT戦略的活用」 6.0 時間と圧縮している。いずれも平日の 0.5 日の開催を想定している。



### 3カ月モデル

- 学び直し講座のカリキュラム 60 時間をフルに実施するモデルが、②の「3カ月モデル」である。
- eラーニングについては、42.0 時間を3カ月で学習するので、1カ月モデルに比べてじっくりと取り組むことができる。
- 集合研修も「最新テクノロジー」6.0 時間、「IT戦略的活用」12.0 時間の実施が可能となっている。
- この場合、各回を1日（6.0 時間）とし計3回とする運用、各回を0.5日（3.0 時間）とする計6回の運用、あるいはそれらを組み合わせたパターンも考えられる。

以上